2022
文集
芸同好会作品

【小説・シナリオ】

退屈 千本田明華

気遣う心の在りか 松久泉美

化け物アパート もとさと

【イラスト】

literary club halloween content

"true meaning"

あとがき シーナ・ベル

イラスト集 もっちもち

退屈

千本田　明華

残暑の残る秋、有本拓也は平凡と感じる自らの人生を変えるような商売を考えていた。有本は物心ついた時から何事もうまくこなし周りからの信用もある要領の良い男だった。しかし、周りから見たら順風満帆な彼だが病的に退屈しやすく刺激を求める傾向がある。それは彼の趣味を聞けばわかる。たとえば、見ず知らずの人に電話をかけその人の知り合いのふりをして会話する。あるときは、自身の小柄な体格を生かし、学生や女性といった姿に変装し、都会を徘徊することもあった。このように周りにはない奇妙な趣味があった。そんな趣味を持つ彼だがこの趣味を誰にも気づかれたことない。ましてや、今のご時世何かあったらインターネットにすぐに広まるというのに、有本はその事を他人にはない自分の個性ととらえ考えるようにした。そしてある商売を思いつく。有本は早速その商売に取り掛かるため、会社の辞表を書いた。

三か月後、「暇だなー」と昼間から能天気につぶやく有本がいた。有本はあれから横浜駅近くの雑居ビルの三階を借り、探偵事務所を開いた。有本の商売は結果としてうまくいった。しかし、その結果、有本は退屈しつつあった。そんな、有本のもとに仕事の依頼者が来た。その依頼者は秋も終わりだというのに、季節外れのつばの長い白い帽子に白いワンピースを着た若い女性だ。有本は「忙しいから依頼は受け付けてないよ」と言った。女性は「いえ、交番の場所を聞きたくて…」と答えた。さて、読者の皆様、少し不思議と思ったのではないだろうか、何故、暇だとつぶやいた有本が忙しいと答えたのか。女性が昼間の横浜駅の近くでわざわざ雑居ビルの3階にある探偵事務所に来て道を聞くのはおかしなことではないか。その理由はこれからの展開でわかる。有本は「わかりました。こちらへどうぞ」というと女性を事務所の中に通した。有本は続けて「私に任せてください。なぜなら私は変装が仕事ですから。」そう、有本の仕事は探偵ではなく変装することだ。

例えば、「彼女に風邪と嘘を言ってデートを断った。俺ふりして家にいてくれないか。」と依頼されたとする。それに対して有本は依頼者の家に行き。依頼者がいつも家で過ごしているような行動をする。もし、依頼者の彼女から連絡が来たときは、趣味で培ったことを生かし、その場をやり過ごした。また、高校生から「僕のかわりに補修を受けてほしい」と依頼があった際は、変装をして学校に潜入したこともある。最初は知り合いに宣伝して始めた商売だったが、有本の仕事のできが良いのか、いつのまにか広がり、今では、こっそり隠している金庫に三百万もあるほどだ。

さて、本題に戻そう。女性は有本に「私はストーカーに悩まされています。今も追われているのです。なので、私のふりをして元町通りを歩いてくれませんか。」と話した。犯罪に巻き込まれるような依頼だったが有本はいつものように「わかりました。では、あなたがいつも身に着けているものを貸してくれませんか。後、所要時間について一緒に相談させてください」と、女性は自分の身に着けているものを渡し、所要時間を話した。身に着けているものは事務所の変装用クローゼットにもある女性に人気のブランドだ。所要時間は彼女が帰宅するまでの一時間となった。そして、有本は女性の姿に変装した。女性はあまりの出来に唖然としていた。有本はそんな反応も気にせず、服の返却や送金方法を説明した。そして有本は、「最後に、何かご不明な点などはありますか。」と尋ねた。すると女性は「どうして、この仕事をしているのですか」と、有本は初めて仕事について聞いてくれたことに素直に内心喜びながら平然を装い質問に答えた「なあに、平凡で退屈だったからです。もっとも、金庫に大金が貯まって、この仕事にも慣れ、退屈しそうですが」と、女性はふっと笑いながら「そうですか、退屈しないといいですね。」と答えた。そうして、有本は女性から借りた。白い帽子をかぶり事務所を出た。

有本は、元町通りを歩いた。周りの人々は有本が男だということに気付いていないかのように自分たちの世界に
いる。それほど出来の良い変装なのだ。こうして、三十分ほど歩いたころ、ふと、有本は依頼について思い出した。
それは、ストーカーについてだ。今回の依頼は、依頼者の代りにストーカーに追われるという内容なので、
気になって後ろを向いた。しかし、誰も後ろに誰もいない。また、周りの人も有本に目を向いている様子もない。
誰も見てないことに不思議と思ったが、依頼を受けた以上、一時間、元町通りを歩くことにした。その後、残りの
三十分、時々、後ろを確認しながら歩いたが誰もいなかった。有本は今回、依頼が失敗したのではないかと不安に
思いながら事務所に戻った。

しかし、有本の予想は多く外れた。なんと、事務所が荒らされ、金庫がなくなっていたのだ。金庫のことは、
先ほどの依頼者にしか話していないため、警察に通報しようとした。しかし、今までの依頼がばれ、有本自身が
警察に捕まる可能性がある。有本は犯人の正体がわかっているにも関わらず、捕まえることにできないことに
やるせない気持ちが湧いた。しかし、同時にこのようなことがあるのかと思い、有本の中で退屈が解消された
感覚が広がり笑みがこぼれた。

気遣う心の在りか

松久泉美

俺の名前京田　佐次郎、俺は漫画研究部の嫌いな先輩に呼び出され、とある駅のホームにいた。その先輩は舞島　愛子という名前で活躍している。女性のような名前だが実際は男だ。高校生でプロの漫画家だか何だか知らないが何かと、俺に突っかかってくる。やれ、世間知らず、やれ、絵が下手だの詰め寄る。絵が嫌いなのは重々承知だから許せるが、むかつくのは兄と仲がいいことだ。兄ちゃんはあいつの漫画の背景画を担当している。何で、あんな嫌味な野郎を？何で、あんな…目の死んでいる不愛想な野郎を…兄さんは愛想がよくて成績も料理もすごくいい人何であんな奴と…そう考えると心底腹が立つ。そんなことを考えていると、その先輩はやってきた。

「あ？なんすか？いきなり呼び出して、」

「次郎、ちょっと付き合え」

俺は思わず不機嫌に対応してしまった。しかし、先輩は気にせず、とある場所に案内してきた。そこは先輩の本当の苗字である島井の表札がついた一軒家だった。

先輩の家に入った後、誰もいないリビングに連れてかれた。

「…あの、これは」

リビングに連れてかれたと思ったら、ペンや消しカスで散らばった机の上に宅配ピザのチラシを出された。

戸惑った。俺に気を使ってか先輩は

「親は共働きでいないから好きなだけ頼め、俺が払う」

と聞いてきた俺は思っていた解答と違い余計に混乱し、感情的になった。

「そういうことじゃない！何であんたの家にいんだよ！なんで出前頼もうとしてんだよ！」

「あ〜、嫌いな奴と飯を食べるとどんな感情になるか」
「は？」
思わぬ答えに気が抜けてしまった。しかし、先輩は遠回しに俺を嫌いといった。俺が嫌い？俺もあんたのことが嫌いだ！そう思いをめぐっていると、先輩は語りだした。
「この前のクリスマスイブ、家族は友達と友達は家族と過ごしているってことで、一人でクリスマスパーティーやったんだよ」
「パーティーって、一人でですか？」
「ああ、そんで、一人ってことで俺の大好物のピザとコーラをたらふく用意した。」
「…は、はあ」
この人が何を言いたいのか分からない…そんな俺をよそに先輩は語り続ける。
「でも、美味しくなかった」
「はあ？」
「いつもより、値段が高いピザを頼んだのに、親から控えろと言われるコーラを好きなように飲んだのに、なんか、美味しくなかったんで、気付いた俺が好きな食べ物は好きな人と食べるピザとコーラだって」
俺はなんとなくこの人の言いたいことが分かり言葉にした。
「…あー、あんたの言いたいことが分かったわ。嫌いな奴と食べるとどうなるか気になったんでしょ。そして代表として俺が呼ばれた、と」
「ああ、そうだ、好きな人との食べ物は美味しくて、一人での食べ物は美味しくなかった。じゃあ、嫌いな奴とはどうなる？美味しいのか？美味しくないのか？それとも、まずくなるのか？気になってな…」

先輩がそんな考えて俺を家に招いたことを知り、少し複雑な気分になったが話を進めることにした。
「…何考えているのか、分かりづらいんですよ。んで、何頼むんですか？俺はピザなんて食べたことありませんから選ぶなんてできませんよ」
「え、食ったことない？ピザ…」
「俺、この山奥で育ったんですよ。ほらそこの」
俺はリビングの大きな窓から自分の実家を指さした。今は寮で生活しているが、昔は山奥で自給自足生活をしていた。なので、俺自身、宅配ピザの頼み方が分からない。
「あ、後、コーラも飲んだことないんでなんかこだわりあるんだったら合わせますよ」
「次郎…お前、やっぱ、世間知らずだな」
聞き覚えのセリフが聞こえた。このセリフは先輩が俺の作品に対して文句を言うときに使う、常套句のようなものだ。これを聞くたびに無性に腹が立つ。
「うるせぇ！デリカシーないよりはマシだ！」
と反射的に言い返したが、先輩は気にせず、慣れた様子で電話をしていた。
「あ、すみません。クワトロピザと期間限定の季節の四種のチーズピザ、後、コーラを四本お願いします」
「っ…人の話聞けよ！」

しばらく沈黙が続いた後、インターフォンのチャイムが鳴り、先輩が対応する。
「ありがとーございましたー」

そう聞こえた後、先輩はピザが入っている箱とコーラを四本持って来て、リビングの椅子に座った。
「さて、さっそく食べますか」
「…」
俺は昔見た、ピザと違い少し戸惑った。先輩はその様子を見て、俺に声をかけた。
「どうした、次郎、怪訝な顔して」
「いや、なんて言うか…俺の知っているピザじゃない…」
「はあ？」
「俺の知っているピザっていうのは、こうなんですけど…」
俺はとっさに紙ナプキンと近くにあった赤いボールペンを使って咄嗟にピザの絵を描いてみた。
先輩はその絵を見て戸惑っていた。理由は分かっている、俺の絵が下手だからだ。
「…なにこれ？」
「ピザですよ！ピザ！ここがチーズで！ここがトマトソース！」
「ああ」
「なんだと思ってたんすか」
「円状になった赤い毛糸」
自分の絵が下手だと自覚しているとはいえ、その評価にさすがにカッときた。
「っ…！じゃあ！そんなに言うなら描いてみて下さい！」
「ああ」
そう言うと先輩は、赤いボールペンを受け取り、すらすらと絵を描いた。それは赤色だけの絵だが、

俺の想像した通りのピザが描かれていた。
「…」
「ま、これで飯食えるからな。さて、食うか、ピザが冷めるぞ」
「…はい、なんか…すみません」
俺は自分の絵の下手さに嘆きながら素直にピザを食べることにした。

俺は、はじめてピザを食べてた。思っていたのと違うが美味しかった。
「うまいか？」
「はい、思っていたのと違いますけど」
「…これ、お前好みだと思うぞ」
そういうと一つのピザを差し出した。
「あ、ほんとだ…でも、どうしてそれを…」
「それ、太郎も好きなんだよ」
当然、兄のあだ名が出た。京田　佑太郎、俺の兄で先輩と仲が良い。どうして急に兄の名前が…
「兄が？」
「ああ、太郎が言っていた弟と好みの食べ物が一致すると」
「ふーん」
俺はふと思った。俺がひねくれて不味いと言ったらどうなるか。そして、そのことを素直に先輩に聞いてみた。

「…もし、俺がひねくって不味いって言ってたらどうしていましたか？」
「ねーよ」
即答だった。どうして先輩はそう言えるのだろうか。俺のことが嫌いだし、俺も先輩のことが嫌いなのに
「どうして？俺はあんたの嫌いな人代表だ」
「…俺がお前を嫌う理由は兄だ」
「は？」
おれは戸惑い、声が出てしまった。
「…俺にも兄がいる」
そんな俺をよそに先輩は話を続ける。
「昔は仲が良くて兄ちゃん、兄ちゃん、ってよく後ろにくっついていた。」
「そうすると、兄は優しく微笑みをくれる」
「俺は普段から無口で不愛想だったけど、兄の前ではおしゃべりで自然と笑顔になれる素直な子になれた」
「俺には、兄が必要だった」
「…」
先輩はしばらく押し黙った。そして語りは続く。
「…でも、兄は俺のこと要らなかった」
「ある日、兄は恋人の家で暮らし始めた」
「当時兄は…高校生だった」
「俺は…その…兄が恋人に何かひどいことをされて、暮らし始めただと思い込んで…後を付けた」

「…兄の様子をこっそり見てみた」
「いつもは微笑むだけの兄が、恋人と大声で笑いながらテレビを見ていた」
「げらげら笑っていたんだよ。腹の底から」
「俺は初めてみた。心の底から笑う兄を…」
「俺の知っている兄は、俺にテレビを譲ってくれた、誰に対しても優しく、微笑むような兄なんだ…」
「…俺は、俺は兄の本当の姿を知らなかったんだ…あんなに幸せそうな兄を…」
先輩は悲しそうにうつむく。そして、俺は興味本位で聞いてみた。
「…その後、お兄さんとは？」
「…親戚の集まりとかで時々、でも俺の知っている兄はいない」
「嘘をつく兄はいない…兄は俺から解放されて幸せに暮らしているんだよ…」
自傷するように頭を掻きむしった。俺はそんな様子の先輩を見ても、自分がなぜ、
先輩に嫌われているのか理解できなかった。
「…それが俺を嫌う理由にどうつながるんですか？」
「…お前を見ていると思いだすんだよ…昔の自分を…昔な素直な自分を…兄ちゃんを苦しめていた自分を…」
「先輩！」
俺はいつもと違う先輩を見たくないと思い大声で呼び掛けた。ハッとしたのか、
先輩は頭を掻きむしる手をやめた。俺は先の言葉に悩んだ。あなたは悪くないと言って、
先輩は素直に受け入れてくれるのだろうか。…いや、先輩は俺を責め立てるだろう。本当にそうなのか、

兄ちゃんの気持ちわかるのか、と。俺はしばらく悩み、この話を逸らすために言葉を発した。
「…食べましょう、ピザ、本当に冷めますよ」
「…ああ、すまねえ」
素直に聞き入れ、ピザを食べ始めた。

一通り、食べ終わり、俺は今回のピザの感想を聞くことにした。
「…で、どうでしたか？」
「あ？なにが？」
「いや、なにが？じゃなくて…当初の目的！」
「ああ、それか…楽しくはなかったな」
でしょうね。途中で自分自身の後悔を吐露しはじめたから、そうなるな。
「でも…ありがとう」
そう言った先輩はどこかすっきりした顔をしていた。
「…そうですか」
俺はテーブルの上を片づけ、先輩の家を後にした。俺自身、先輩との食事は楽しいと感想は言えないが、自分自身を振り返る機会になった。正直、先輩のことは嫌いなままだ。しかし、先輩の吐露を聞かなければ自分自身の行いが兄を苦しめ最悪な結果になっていたかもしれない。これからは、嫌いな奴として接するのはやめよう、
…反面教師として接しようと思った。しばらくすると兄から、電話がかかってきた。

「次郎―、夕飯何がいい？」
俺はいつも、その日に食べたい物を素直に答えてたが、先輩の話を聞いて兄の好きにさせようと思いこう答えた。
「何でもいいよ！」
しかし兄は
「次郎…それが一番困るんだよ！」
…気を遣うのは難しい、そう、改めて感じた。

化け物アパート

・概要

1時間も掛からずに終わらせられる初心者向けソロシナリオ。
推奨技能は《目星》のみ
むしろ《目星》以外は振らないレベルなので何の技能を持ってきてもOK
あとSAN値がゴリゴリ削れるシナリオのためある程度は必要である。

・あらすじ

朝起きたら段ボールの上で寝ていたPC！自分は新居に引っ越す途中で寝てしまっていたのだ！
だが外に出ようとしたが出られない！PCは閉じ込められてしまった！どうにかして脱出することは出来るのか！

・真相

ハスターの名状し難き誓いの信奉者（6版では「名状しがたい憑依者」マレウスP113、7版マレウスvol.1 P147）になるアパートである。
部屋に閉じ込めて脱出法を探させ、謎の言葉を読ませ続けいつの間にか契約を結んでしまう。
黒幕は不動産の人間でハスターの信者である。その男は臆病で警戒心が強く、適当な人間を拉致・監禁し洗脳するよりその人間にわからない形で神を崇めてもらおうと考えた。
そしてアパートの契約書に魔術を仕込み、名状しがたき誓いの信奉者になるある程度の前段階をこなす。だが最後の引き金は、信奉者に変貌する人間の意志で呪文の最後を読まなければいけないのだ。そのため複数の人間を

閉じ込め紙を見つけさせ、読ませようとしている。呪文が複数に分けられているのは、一枚の長い呪文にしてしまえば全部読む確率が減ると危惧してのことだ。
今回巻き込まれるPCは、その部屋に8回目に閉じ込められた人間でありメモを残したのは3回目と7回目の人間である。
脱出するには浴室のメモを拾い、八枚の紙を破り捨て閉じ込めている結界を破壊することが必要だ。だが、閉じ込められたことは始まりに過ぎないかもしれない。男は臆病であり、PCに結界が破壊されたということがわかると店をやめ、そこから逃げ出しまたどこかで同じようなことを繰り返すだろう。PCは不動産屋の男を追うかもしれないし、男は臆病ではなかったことにしてプライドをズタズタにされた男がPCを狙って事件を起こすかもしれない。結末はKPに託される。

・特殊ルール
　特殊ルールとしてこのシナリオでは各部屋にある謎の紙の言葉を声に出して読んでしまうと、名状しがたき契約者へとどんどん近づいていく。
「い」「あ」「い」「あ」「は」「す」「た」「あ」の8つの紙であり、声に出して読むごとに、ステータスが増加しSAN値が減っていく。（ステータスの増加はシナリオが終了してから、1ヶ月ほど経過後に元に戻る。6版の場合にはDEXは増えない。）
口に出して読んだ紙自体も黒かったインクが禍々しい赤色に変化する。これに気づくのには《目星》《INT》を振らせてもよいし、振らせず気づかせてもよい。
「声に出す」というのは探索者だけではなくPLのメタな会話の時に喋ったことをカウントしてもよい。

その場合はPCに隠してステータスの増加とSANチェックを説明せずさせ、《INT》のハード成功などで「自分が書かれた言葉を言ったという扱いになった」ということを理解することになる。

どちらの場合でもカウントするのは、紙を手に入れてからであり、手に入れた状態でないとその文字を読んでしまった時の変貌はない。

1回目〜2回目　なし

3回目　CONとPOWが5分の1増加する。「体がムズムズする。体が少し大きくなった気がするし、なぜか薄ら寒い。進んではいけない領域に入ってしまったような…」SANチェック1/1d3

これ以降、紙を見つけた時《POW》に成功しないと、体が勝手に動き文字を声に出して読んでしまう。成功失敗関係なく、自分の体が自分でないナニカに操られているような恐怖に襲われた探索者はSANチェック（声に出してしまうときのSANチェックとは別として扱うこと。紙を見つけた時にSANチェック）。

4〜5枚目　1/1d3　6〜7枚目2/2d3　8枚目3/3d3

4回目　CONとPOWとSTRが元の数値の5分の1増加する。SANチェック1d3/1d5

5回目　CONとPOWとDEXが元の数値の5分の1増加する。SANチェック1d5/1d8。

6回目　CONとPOWとSTRとDEXが元の数値の5分の1増加する。SANチェック1d8/1d10。

7回目　INT、EDU以外のステータスが元の数値の5分の1増加する。SANチェック1d10/1d50。

8回目　INT、EDU以外のステータスが元の数値の5分の1増加。SANチェック1d50/1d100。これに生き残っても探索者はあと数時間で変貌が完了し、全ての正気度をなくすだろう。探索者ロストです。

・シナリオ本編

・導入

（KP 情報：この時点で PC はアパートに荷物を送り、移動してきたあと、『呪文：記憶を曇らせる』で記憶を曇らされている。理由としては意識が戻ると突然アパートにいる、記憶もなくそして出られないという状況をつくることで恐怖心をあおり、脱出への意識を高めようと考えた為である。）

窓から雨の音で探索者は目が覚める。体が痛い。起き上がろうとして探索者は気づくだろう、君は段ボール箱の山の上に寝てしまっていたのだから。

何故こんなところでと思い探索者は記憶をたどるだろう。探索者は引っ越ししようと考え、不動産屋に行き、部屋を見てこの部屋にしようと考え、契約書にサインをして…そこから記憶がない。

スマホを見れば今が探索者の覚えている日付の一週間後だということがわかる。

段ボール箱の中をのぞくと、探索者の私物がちゃんと入っている。

突然アパートの中に居ること、記憶がないことなど色々なことがあなたの精神をかき乱し恐怖させるだろう。

SAN チェック 1/1d3（継続探索者なら 0/1d3 でもよい）

（KP 情報：この時点で探索者は左側の洋室に居る。段ボールなど荷物も全てここにある。）

・LDK

知らない部屋、知らない冷蔵庫に台所。それらの中に自分の部屋に置いてあったテーブルや椅子などが存在していることがとっても奇妙で少し恐怖を覚えた。

部屋自体は普通のフローリングの部屋で

《目星》→成功で窓に「い」の紙が挟まっていることがわかる。
（KP 情報：窓自体は開くが、窓に格子がかかっていて外に出ることは出来ない。）

・玄関前

玄関は鍵を使っても開かない。何か強い力で押さえつけられているようだ。そこで探索者は気づくだろう。玄関になにか小さな紙が一枚転がっている。そこには「あ」と書かれている。

《INT》→ドアは何回開けようとしても開かない。もしかして自分は閉じ込められてしまったのだろうか。SAN チェック 1/1d3

《目星》→洗濯機の横の隙間に手帳からちぎり取られたような大きさの、狭いところに押し込まれていたためしわくちゃになっている 1 枚の頁を見つける。ぐちゃぐちゃの字で何かが書かれている。

「見つけた紙の書かれていた文字を唱えていくごとに俺は化け物になっていく。もう正気を保てるかも怪しい。名前も知らない、姿も知らないナニカのことを心から信奉しようとしている。これを見ている奴がいるなら、変な紙を見つけても絶対に口に出して読むな。俺みたいに　『ここからは字がとてもぐちゃぐちゃで読み取れない』いあ　いあ　はす　たあ」

（この紙はヒントでありながら罠でもあり、他の 8 枚の紙と同じように《POW》で判定し最後の文「いあいあはすたあ」を口に出して読んでしまったら、その時点で探索者は名状しがたき信奉者へと変貌してしまう。これを KP は難易度が高いと考えるならこの紙での変貌はなしとしてもよい。）

・トイレ

普通のトイレだ。可も不可もなく、引っ越してきたすぐのアパートならこのくらいだろうという綺麗さだ。

《目星》→トイレの後ろに「い」の紙を見つける。

・浴室

一軒家にはよくある1点ユニットバスの風呂である。浴槽には蓋がしてあり、その上に一枚の紙が置いてある。

「あ」の紙。

《目星》→風呂場の排水溝の中にジップロックにつつまれた紙が隠されている。

「この紙を見つけた君は洗濯機の横に隠されているメモを見ただろうか。私は遅かった。脱出の手がかりを探すため、全ての紙を探しその文字を口に出してしまったあと、この紙をみつけてしまった。既に体も心も変貌し正気を保てているのが奇跡なほどだ。だが、今の自分だからこそわかることがある。自分を変貌させている魔術と部屋に閉じ込めている魔術の起点は同じものだ。起点を破壊すればここから脱出できるだろう。この紙を見るものが良き人であることを祈る。」

（KP 情報：この文を描いた人間は紙を隠した後、中央の洋室で自害しています。自身の尊厳のためなのか、変貌する恐怖に耐えられなかったのか、もしくは変貌した自分自身が誰かを傷つけないためなのか。KP は自由に決めてよい。）

・左の洋室

段ボールの山がある。一つ一つ見ていくとどれも自分のものだ。通帳は金が減っている。

《目星》→段ボールの箱の下に「は」の紙を見つける。

・中央の洋室

《目星》→「す」の紙を見つける。

・右の洋室

《目星》→「た」の紙を見つける。

・ベランダ

窓を開けてベランダまで出ることは出来る。外は豪雨だ。

この部屋は3階の位置にあり、そのまま下に降りることは出来ないうえ結界も張られている。PCが外に出ようと《登攀》《跳躍》などを振る（振らずに自殺同然で下に降りようとする）もしくはベランダから下を見ようと近づくなら、ベランダの縁から外に出ることができないことがわかる。

《INT》→成功で外は豪雨なのにベランダは濡れておらず風が吹いていないことがわかる。目を凝らすと水が見えない壁のような物に張り付いており、その壁はベランダ全体を覆っているように思える。SANチェック0/1d2

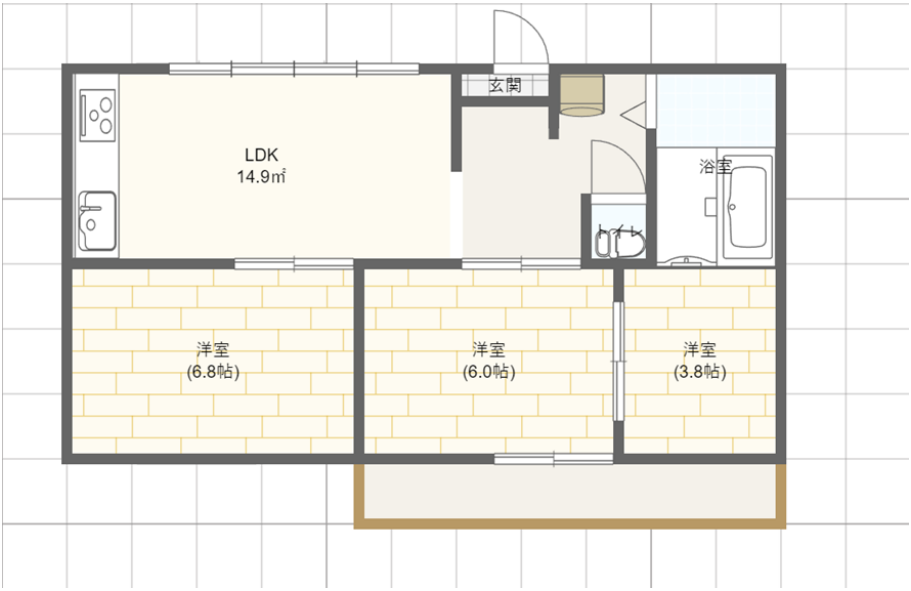
《目星》→右の洋室のエアコン用の室外機の下に「あ」の紙を見つける。

（KP情報：ベランダは結界で覆われているため、空気も入ってくることができない。1日もしたら人はPCが酸欠で死んでしまうかも知れないが、1日経過する前に脱出、もしくは変貌することになるため《CON》ロールなどをする必要はない。）

・その他できることについて

《INT》→筆跡から８枚のメモを書いた人物は同じであることがわかる

警察を呼ぶ→ドアの外に結界が張られているためドアに触ることすらそもそもできない。呼んでもあまり意味がないだろう。


LDK
14.9㎡
玄関
浴室
トイレ
洋室
(6.8帖)
洋室
(6.0帖)
洋室
(3.8帖)

literary club
halloween content
"true meaning"

あとがき

皆さん初めまして、文芸同好会のシーナ・ベルです。
この度はメンバー同士で作り上げた冊子をお手に取っていただきありがとうございます。

私が掲載したイラストは、昨年オンライン飯山祭にて載せた「ハロウィンコンテンツ」を昨年度のメンバーを合わせました。
テーマは「true meaning」。
ハロウィンは本来先祖の霊を向かい入れるとともに悪霊から身を守るために仮装して仲間だよと見せかけたのが始まりと言われています。
このテーマでは死神と葬儀屋をメインに各キャラクターの過去、思想が混ざり合い。意気投合していくの意味が込めています。

今回の飯山祭では、クリスマスをテーマに絵本を作りました。
所々に童話の要素があり、エンディングも皆様の最後の選択で変わります。
是非お手に取っていただければ幸いです。

チーム
アキレス

チーム
ヘラクレス

2021シーズン
おつかれさまでした！
100戦の
その先へ！

3月9日
ミクの日！
39

皆さまこんにちは、もっちもちです
せっかくなので、作品説明を…

①神域リーグ応援イラスト
2022年に行われたプロアマ混合麻雀リーグ戦
「神域Streamerリーグ」の応援イラストととなります
4チーム中2チームしか描けませんでした()
ですが4チームとも最高で
麻雀知らない人も知ってる人も楽しめると思います
是非！！！見てください！！

②初音ミク
上のイラストは自動車レース「SUPER GT」
に参加されているチーム
「グッドスマイルレーシング」のミクちゃんです
激推ししてるチームで、選手もかっこよく…
しかもレースが毎回面白いのです(オタク語り)
これも是非！！見てください！！
下のイラストはらくがきんちょしたものです()

趣味多いミーハーオタクですが
毎日楽しいので良しとします

見ていただきありがとうございました

2022 11 3.4 文芸同好会